

自然の中で育つ子どもの探求心と心の育ち
～園庭に小さな大自然～

発表者 端戸良子 （鳥取ルーテル幼稚園）
指導助言者 塩野谷斉（鳥取大学地域学部教授）
司会者 田中信恵 （鳥取ルーテル幼稚園）
記録者 小林令奈 （鳥取ルーテル幼稚園）
高岡のぞみ（鳥取ルーテル幼稚園）

1 発表の概要

(1) 設定の理由

自園は、実のなる木々、プランターでの野菜栽培、鯉やカメのいる池などがある、自然豊かな園庭を有している。現代の子どもたちの家庭での過ごし方は、タブレットやゲーム機を使い一人で遊ぶといった機械との関わりが多く、戸外で遊ぶ、近所の子どもと遊ぶなどの人との関わりが少ない。その中で育った子どもたちが、自園で自分たちが育てたものや池での遊びを通して生き物と関わり、何が育っているのか、また収穫物を用いた調理体験に積極的に取り組むことで、食への関心などの視点などでどのように成長、変化するかということに焦点をおき研究を進めた。

(2) 取り組みについて

園庭にある自然物との関わりや、地域の農作物の収穫や調理といった一連の体験の中で、その子どもたちのつぶやきや写真記録をもとに5領域、育ってほしい10の姿にあてはめながら子どもの現状や育ちを把握、共有した。また家庭との連携で意見も聞き、子どもたちのエピソードの記録からどのような育ちがあるのかをみていくと同時に園内研修、保育の振り返りを行うことで成果や課題について検証、次の保育や子どもの育ちに沿った環境作り、クラスの活動に繋がれるようにした。

(3) 実践例

事例① トウモロコシの栽培 2023 年度年中児夏

子どもたちが育てたトウモロコシが収穫間近でカラスに食べられた。残念な気持ちもあったが、子どもたちからは「食べられるところがあってよかったね」「カラスも喜んでいるんじゃない？」と前向きな言葉やカラスの気持ちを考えた優しい言葉が出てきた。一方で、後日カラスを追い払う姿もあり、残念な気持ちや悔しい気持ちも伝わってきた。子どもたちの感じたことが今後の栽培活動にどう影響するのかを引き続き見守った。

事例② 野菜の栽培についての話し合いから調理保育まで 2024 年度年長児春

育てる野菜を相談した際、1つのグループから「とうもろこしがいい」「(昨年) カラスに食べられたもん」「リベンジリベンジ」「今度はカラスに食べられないようにする」という声が聞かれた。その後教師がカラス対策について問いかけると、「何か被せるのは？」「野菜にかけるのあるよね」とネットを被せることに決めた。昨年度のトウモロコシの栽培が、悔しい思いや“今度こそ”という心動かされる体験になったことが窺える。

その後、絶対にとられたくないという思いからさらに頑丈なネットをつける。すると直接野菜が見づらくなってしまう、興味が薄れる様子があったが、トウモロコシの絵本を読むとすぐにトウモロコシを見に行き、再度興味をもつきっかけとなり、自分たちで図鑑を使い調べることに繋がった。

子どもたちが絵本から得た情報をもとに、「もうとってもいいんじゃない？」という声があが

り、収穫をする。子どもたちは「(皮を) 何枚むいたらいいんだろう」「数えてみる?」という会話をしており、一枚一枚数えながらむいてグループ毎に数や大きさを比較した。

収穫したトウモロコシで何を作るか尋ねると「コーンスープがいい」という意見が出たので、コーンクリーム缶と収穫したトウモロコシを使って作った。子どもたちはコーンスープの作り方は「粉とお湯がいるよね」と即席スープの作り方をイメージしていた。完成したスープを前に「コーンあんまり好きじゃない」と言う子どももいたが、グループの友だちが「少し食べてみたら、自分で作ったコーンだから美味しいかもよ」と声をかけた。食べてみたら美味しかったようで、完食しており、ほとんどの子どもがおかわりをするほど飲んでいた。

事例③ ダンゴムシの発見 2024 年度年少児春

ダンゴムシを探し集めていた子どもが「見て、たくさん見つけた」と教師に伝えに来た。教師が「かわいいね」「こっちは小さいね」と会話をしていると、クラスの友だちが集まってくる。「ぼくにも見せて」「触ったら丸まるよ」「優しく触らないとつぶれるよ」「わたしも見つけない」「こっちにたくさんいたよ」などと会話が広がり、その後友だち同士の関係が深まった。

事例④ カタツムリのお世話 2024 年度年中児春

園庭でカタツムリを見つけ捕まえるもそのまま置いていたので教師が「お世話しないと死んじゃうかも」と声をかける。それをきっかけに一人の子どもが「図鑑でお世話の仕方を調べてみよう」と友だちを誘う。周囲の子どもも仲間に加わり葉を集めると、「このままだと大きいからちぎってあげよう」と皆で葉を細かくし始めた。それから毎日カタツムリのおうちを掃除しお世話をするようになった。しかし長期休みに一人が持ち帰ったものの、お世話が续かず死んでしまった。友だちと一緒に環境や意識が向くような大人からの発信も大切ということを感じた。

事例⑤ ゲンゴロウ探し 2024 年度年長児春

園庭の池にいるゲンゴロウを見つけ、捕まえようと何度も挑戦するもなかなか捕まらない。バケツや網を持ってきたが最終的に手で捕まえる。教師が捕まえたゲンゴロウをどうするか尋ねると「大事に飼うよ」と言う子どもがいる一方で、少し考え「かわいそうだし放してあげよう」という声が出た。他の子どもも「川に戻してあげようか」と言い、皆で相談して放すことに決めた。“せっかく捕まえたのに”という気持ちもあり葛藤していたと思うが、生命の大切さに気づき生き物のことを考えた結果の選択をしたと言える。

(4) 反省と考察

年齢ごとに姿は異なるが、子どもたちが自ら園庭の自然と関わり、四季折々の植物、生き物に触れ、心動かされる体験の中で自然の変化に気づき、面白さや不思議さを体で感じることで、自然に関心を持つようになっている。

3 歳児の子どもたちは、虫や花などを先生と一緒に集めて、家に持ち帰りたいという気持ちが強く、虫や花に触れる過程で、新たな発見をする楽しさを実感している。4 歳児の子どもたちは友だちと一緒にであることに楽しさを感じるようになり、自ら興味のあるものを探し、友達に知らせることで友だちとの関係がひろがっていく。また、園内で見つけた生き物を育てたいという気持ちが強く表れるようになる他、栽培物も友だちと一緒に育てる楽しさを感じ、収穫したものをどうするかをクラスの中で決めて食べようとする姿が見られている。しかし、子どもたちだけのお世話には限界があり、大人の言葉掛けも必要である。5 歳児ではどの季節にどの植物になるか、どんな虫がいるのかということがある程度想定できるようになり、自分と思いが似ている友だちと一緒に園内を探す。予想と違うものを見つけると、自ら友だちといっしょにその分野に詳しい友だちに聞きに行く、図鑑などで調べるなどして新しいことを知ろうという姿が見られる。また、年少、年中を経験していることで、最後までやり遂げたい気持ちが強く、そのための工夫を友だち同士で考えられるようになってきていると

感じる。

(5) 今後の課題

今後は異年齢での関わりをどのようにしたら広がるのか、保育者自身が園庭の環境に目を向け、さらに知識を増やし、心揺れ動く経験を子どもたちと一緒にすることで興味や関心が広がり、遊びこめる環境作りをすること、生き物に生命があるということに目をむけ、生命の尊さに気付くことができるようになること、「持続可能な社会を作るために必要な環境観」ができるような自然との関わりが課題である。

2 研究討議

(1) 発表内容に対する質疑応答

Q：園庭のさまざまなメリットを聞くことができたが、デメリットはなにか。虫の苦手な職員もいるのでは？

A：虫が苦手な職員もいるが、様々な人がいるということも伝える必要があると考え、そのままの姿で関わっている。徐々に理解してくれるようになり、「先生、虫がいたから取ってあげる」と言う姿も見られる。

園庭が狭いので、夏は芝生の上にプールを置いている。プールを撤去すると芝生がなくなってしまっているので、その管理をしなくてはならないというマイナスな面はある。

〈指導助言〉

◎とても素晴らしい園庭環境だが、運動場としてではなく庭としての園庭なので、運動会としての環境は犠牲になっている感じがする。その点についてはどう対応したらよいか？

手段① 運動会を別の場所でやる→運動会の会場が親しみのある場所ではなくなってしまいが、年1回の行事のためにおもしろい園庭をなくしてしまうのはもったいない。

手段② 運動会そのものを変える。直線のかけっこをしないなど、目的を考え、競技のやり方を工夫する方法。

手段③ 運動会をなくす。保護者の問題もあるので、なかなか難しいと思う。

◎芝生の管理はなかなか大変なことだが、工夫もできる。芝を虎刈りにした園があり、模様ができたことによって子どもの動きが多様化したという例があった。

◎虫が苦手な職員については、我慢が必要なこともあるが、苦手を敢えて見せることも大事。虫が苦手→子どもがいたずら心で追いかけようとする→鬼ごっこに発展というのも素敵なおこと。また、ピアノを上手に弾けることも素晴らしいが、ピアノが苦手な先生がつまずきながらも頑張っているというのも子どもは頑張って歌うきっかけになることもあるので、保育者が苦手を全く見せないようにする必要もない。

Q：園庭の環境整備について気を付けていることや気にかけていることは？

A：木の実等をとる経験のある年長の子どもから「もうとれるんじゃないか」という声が出る人が多いが、教師も収穫の時期を把握して伝えるようにしている。また、今年は梅やびわがとれなかったので子どもたちと何がよくないのか相談しながら進めている。教師だけでは限界があるので、木の専門家に聞く、詳しい職員にアドバイスをもらう、などしてわからないことは自分たちだけでしようとせず他の人に聞き相談し合いながら行っている。

(2) グループ討議（5グループのまとめ）

① それぞれの園で自然環境についてどのように工夫しているか

- ・実のなる木を植えたりツリーハウス、デッキなどを設置したりしている。また、実のなる木を植えたことにより、高い場所の実をつついて落とす経験ができたり、虫や鳥が集まってくるようになったり、木陰ができたりと様々なメリットができた。
- ・自然環境がない園では、畑を借りたりプランターで野菜を育てたり、生き物を育てたり、近くの公園に出かけたりして自然に触れられる機会を作っている。知識のない職員が多い園もあるが、農家の方の協力を仰ぐなど、他の人の手も借りて工夫するようにしている。

② 自然の中で育つ子どもの育ちや影響などはどんなものか

- ・自主的に自分で考えて遊ぶようになる。
- ・自ら自然に触れ、新たな発見をする姿も見られる。
- ・命の大切さや、野菜ができていく過程、変化に気づけるようになる。
- ・自然の中で過ごす中で実体験が増え、大きな学びに繋がっている。

3 指導助言（全体まとめ）

◎保育を行うにあたって自然環境が大切ということを否定する人はいない。100 年以上前から、子どもが自然の中で遊ぶことは重視されてきた。昭和初期には、森の幼稚園や家なき幼稚園が注目を浴び、それを取り入れたかった街中の園は、郊外に出て自然の中で遊び帰ってくるというような体制をとっていた。街中の小さな自然を見つけるということも大切な感性だが、自然と触れ合うことができるような工夫も必要である。

◎自然環境がない場合には、環境に来てもらう工夫も必要になる。一例として、食草を植えるという選択肢がある。植物を植えると虫や鳥などが来てさらに自然環境が広がっていく。虫が来た時には、すぐに教えてしまうのではなく、「きれいだね」「なんという種類だろうね」など声をかけると、「図鑑で見てみる」と子どもが自分で興味をもったものを調べようという気持ちが生まれ、学びが深まっていく。

◎環境というものは自然環境だけではない。今回の発表の中であったトウモロコシに関する絵本も人工物であり、実体験ではなく間接経験だが、自然物と人工物を行き来することで経験は深まる。

◎自然とはなにか。田畑や用水路は自然と思われるが、人が作ったものであり、人の手が加わっていないものは原生林くらいしかないが、原生林は危険も多く子どもが遊べるような環境ではない。正確にいうと、“半自然” が子どもにとって大切な環境である。

